

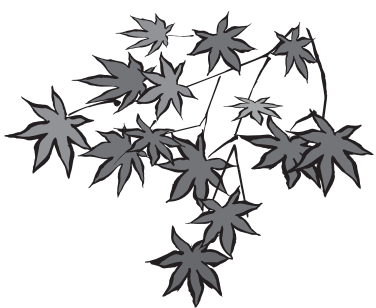


季節を知ったら
暮らしが楽しくなった

（第七〇号）

立冬

十一月七日



神宮徴古館開館百年

「神宮の博物館」として知られる神宮徴古館がこの秋、開館百年を迎えました。倉田山に建つルネッサンス風の白亜の建物は、赤坂迎賓館などを手がけた宮廷建築の第一人者、片山東熊とうくまの設計によるもの。今でも目を引くモダンさですから、開館当時はぜひ分と話題となったことでしょう。一般の観覧が始まった初日は、一万六千人が訪れたといわれています。

神宮徴古館は明治四二年の第五七回式年遷宮の年に開館。太平洋戦争末期の空襲で罹災し、九割方の所蔵資料と、外壁以外は焼失しますが、昭和二八年の第五九回式年遷宮の年に再建された経緯をもちます。

開催中の百周年記念展「神宮の国宝・重要文化財」を拝見すると、神宮にちなむ古文書や絵図だけではありませんでした。江戸時代に作られた地球儀や天球儀、アジア航海図、貿易商の角屋家の旗など見ているだけでも楽しいものもありました。特に天球儀と地球儀は暦学者の渋川春海しゅくわんが手作りのしたもの。紙張子に白胡粉ごんぷんを塗って天空に見立てた天球儀には星座が緻密に記されていたり、五大陸が色分けされた地球儀では、日本は金色に色づけされ、地図というより絵画的な印象を受けました。伊勢の古老は、「古いものは徴古館へもっていったものや」といいます。旧家に残された多くの資料が徴古館へ寄贈されたことでしょう。目録を見ると、受入年月日が記されている資料もあります。

徴古館の「徴」は、明らかにする、という意味があります。古くを明らかにする、まさしく館名の通り、歴史資料を集め、そのモノを明らかにしてきたのでした。

暦は立冬。徴古館にとって百回目の冬に入ります。

文 千種清美

